

杜甫と裴冕——成都草堂の造営をめぐる覚書——

松原 朗

専修大学文学部教授

乾元二年（七五九）の秋、華州司功參軍を免官された杜甫は西の秦州へと旅立ったが、そこを定住の地とするこ
とは叶わず、同谷を経由して、同年末に成都へと辿り着く。それは杜甫自らが「奈何迫物累、一歳四行役」^①と述べ
るように、生存のための已むことを得ぬ苦難の旅行であった。そして成都では、ある仏寺が提供する宿坊で暫時旅
装を解いたものと思われる。

酬高使君相贈

古寺僧牢落、空房客寓居。

故人供禄米、鄰舍与園蔬。

双樹容聽法、三車肯載書。

1 草玄吾豈敢、賦或似相如。

高使君の相ひ贈るに酬ゆ

杜甫

古寺 僧は牢落、空房 客は寓居。

故人 禄米を供し、鄰舍 園蔬を与ふ。

双樹 法を聴くを容し、三車 肯て書を載す。

玄を草するは 吾 豈に敢てせん、賦は或は相如に似たり。

〔大意〕古寺には僧侶の姿は少なく、がらんとした宿坊には旅人が泊まっている。友人は自分に禄米を分けてくれるし、隣近所は畑の野菜を分けてくれる。寺は、法話を聞くのを許してくれるし、本を運ぶのために三車も貸してくれる。揚雄のように「太玄経」を著すのは自分にできる相談ではないが、賦を作れば司馬相如と比肩できるかも知れない。

この詩は、高適の次の詩に答えたものである。

贈杜二拾遺

杜二拾遺に贈る

高適

傳道招提客、詩書自討論。

傳へて道ふ 招提の客、詩書 自ら討論すと。

佛香時入院、僧飯屢過門。

佛香 時に院に入り、僧飯 屢しば門を過ぎる。

聽法還應難、尋経剩欲翻。

法を聴くは還た応に難かるべきも、経を尋ねて剩に翻さんと欲せん。

草玄今已畢、此後更何言。

玄を草すること今 已に畢れば、此の後 更に何をか言はん。

〔大意〕聞くところでは、寺に身を寄せた旅人は、詩文に打ち込んでいるとのこと。香に誘われて寺院に参じ、食事は、僧侶たちの食堂で摂る。法話を聞くことは難しいだろうが、仏典を繕きたいと願っていることだろう。君はもう、揚雄のように「太玄経」を著した。これ以上、何を語ることがあるだろうか。

高適詩の首聯「傳道招提客、詩書自討論」を見ると、杜甫は成都に到着して早々に、自分が仏寺に身を寄せている近況を高適に知らせている。その知らせを受けて、高適がこの詩を杜甫に送ったのである。高適はこのとき彭州刺史であり、成都の北ほど近いところにいた。杜甫は高適と、この時点で二十年ばかりの旧知の関係にあり、刺史

という地方行政の大官となつてゐる高適に、杜甫は物心両面の支援を期待してゐたものと思われる。

一 草堂の造営

成都に到着すると問もなく、成都の西の城外に草堂を造り始める。杜甫は、秦州でも同谷でも、自らの草堂を持ちたいと願つて土地を物色してゐた。しかしなぜ秦州や同谷と事情が異なり、成都では草堂を手に入れることができたのか。それは成都到来の直後から、杜甫が当地の官僚・名士たちの支援を首尾良く取り付けることができたためである。

卜居

浣花溪水水西頭、主人為卜林塘幽。

浣花溪水 水の西頭、主人 為に卜す林塘の幽。

已知出郭少塵事、更有澄江銷客愁。

已知る 郭を出でて塵事の少きを、更に澄江の客愁を銷す有り。

無數蜻蜓齊上下、一雙鸂鶒對沈浮。

無数の蜻蜓 齊しく上下し、一雙の鸂鶒 對して沈浮す。

東行萬里堪乘興、須向山陰入小舟。

東行 萬里 興に乗ずるに堪へたり、須く山陰に向ひて小舟に入るべし。

〔大意〕 浣花溪の流れの西の岸、その林と池の間に「主人」は住居を造ることになった。成都の城郭を出て、世間の煩いがないことは承知の上だが、澄んだ川が流れて、わが旅人の愁いを慰めてくれる。多くのトンボが一斉に上に下へと舞い飛び、つがいのおしどり向き合つて水に潜る。万里橋の袂から舟に乗つて、万里の長江を東に下ると思うだけで胸が躍る。きっと自分も、あの風流の王徽之が雪の夜に戴逵を訪ねたように、会稽山陰の地に向かつて小舟に乗ることにしよう。

居を卜す 杜甫

この詩は、草堂を造り始めた時の作である。卜居とは、地を卜ってそこに住まいを構えること。この原義に従えば、詩は、いわば草堂の地鎮祭における制作ということになる。選ばれた土地は成都の城外、浣花溪（錦江）の西の畔りで、木々が茂る一角である。

卜居の「主人」を誰と見るのか、それがこの詩の解釈上の懸案であるが、ひとまず杜甫詩の標準的な注釈である仇兆鰲『杜詩詳注』（以下仇注）巻九に「主人公自謂」、すなわち草堂の主人となる杜甫自身のことと注するのにおう（この懸案は後に検討）。もつとも「主人」が杜甫であったとしても（また別の特定人物であっても）、下に掲げた一連の詩が示すように、草堂の造営は成都近隣の多くの人々の援助を得て行われたことは明らかである。

○王十五司馬弟出郭相訪兼遺當茅屋貲 杜甫

客裏何遷次、江辺正寂寥。肯來尋一老、愁破是今朝。

憂我當茅棟、携錢過野橋。他鄉唯表弟、還往莫辭遙。

○蕭八明府美処覓桃栽 杜甫

奉乞桃栽一百根、春前為送浣花村。河陽縣裏雖無數、濯錦江辺未滿園。

○從韋二明府續処覓綿竹 杜甫

華軒藹藹他年到、綿竹亭亭出縣高。江上舍前無此物、幸分蒼翠拂波濤。

○憑何十一少府邕覓椳木栽 杜甫

草堂塹西無樹林、非子誰復見幽心。飽聞椳木三年大、与致溪辺十畝陰。

○憑韋少府班覓松樹子栽 杜甫

落落出群非櫟柳、青青不朽豈楊梅。欲存老蓋千年意、為覓霜根數寸栽。

○又于韋、処、乞大邑瓷碗 杜甫

大邑燒瓷輕且堅、扣如哀玉錦城傳。君家白碗勝霜雪、急送茅齋也可憐。

○詣徐卿、覓果栽 杜甫

草堂少花今欲栽、不問綠李與黃梅。石筍街中卻歸去、果園坊裏為求來。

二 草堂の迎賓

草堂がどのようなものであったのか、その立地環境は、近年の研究で次第に明らかになりつつある。⁽²⁾ 草堂自体の規模や布置については、まだよく分からない点が多い。ただ間違いないと言えることは、「窮乏した漂泊の詩人」には似つかわしくないほどの大きな規模を有していたことである。後年、草堂の造営を憶い出して綴った詩句「誅茅初一畝、広地方連延。經營上元始、斷手宝応年」(「寄題江外草堂」詩)を見ても、茅屋を結んだ一畝の敷地の周囲にはさらに広い園林が延び、その園林も含めた草堂全体の完成までには二年余りの時間を要するものだった。その規模は、草堂造営の当初に近隣の人士に提供を求めた樹木の数からしても推し量ることができる。縣令の蕭實には、桃の苗木を百本、また縣尉の何邕には、十畝の広さの木陰を作るために檜木の苗木を求めている。そこにさらに竹と松、それに李や黄梅などの実を付ける果樹が加わるのである。こうした樹木が草堂の庭を飾った時、それは名士の別業を彷彿とさせるほどに立派な園林となることが期待された。

杜甫の草堂は、人目にも羞ずかしくない規模を持つものであった。その草堂に、杜甫は客人を招き始める。杜甫の現存する千四百首余りの詩には、友人宅を訪ねたことを詠ずる詩は何首ある。しかし自宅に客人を招く詩は少な

く、ほぼその全てが成都の草堂に限定されている。このことを見ても、杜甫が草堂の出来映えに自信を持っていたことが分かる。

しかも草堂の客人の一半は、官人であった。杜甫は、成都という地域社会の中で、その社会の支配層である地方官僚たちを招き、彼らを自宅に請じ入れることによって、彼らの価値の体系（人脈）の中に自らを位置づけようとした。恐らく杜甫は、自らを長安の詩人であったこと、また肅宗皇帝に近侍する供奉官の左拾遺であったこと^③、そして今は成都の郊外で高踏の生活を送る文雅の隱士^④であることを誇示することで、成都という地方社会に己れを「名士」として売り込み、成都における生活基盤を確かなものにしようとした。こうして「都・雅」を渴望する成都の知識人たちの心に、杜甫は投じようとしたものと思われる。

○賓至 杜甫

幽棲地僻經過少、老病人扶再拜難。豈有文章驚海內、漫勞車馬駐江干。
竟日淹留佳客坐、百年粗糲腐儒餐。不嫌野外無供給、乘興還來看菜欄。

○有客 杜甫

患氣經時久、臨江卜宅新。喧卑方避俗、疏快頗宜人。
有客過茅宇、呼兒正葛巾。自鋤稀菜甲、小摘為情親。

○魏十四侍御就弊廬相別 杜甫

有客騎驄馬、江辺問草堂。遠尋留藥價、惜別倒文場。
入幕旌旗動、歸軒錦繡香。時応念衰疾、書疏及滄浪。

○徐九少尹見過 杜甫

晚景孤村僻、行軍數騎來。交新徒有喜、礼厚愧無才。
賞靜憐雲竹、忘歸步月臺。何当看花蕊、欲發照江梅。

○范二員外邈吳十侍御郁特枉駕闕展待聊寄此作 杜甫

暫往比鄰去、空聞二妙婦。幽棲誠簡略、衰白已光輝。
野外貧家遠、村中好客稀。論文或不愧、肯重款柴扉。

こうした官人招待の頂点となるのが、高適および嚴武の草堂來訪である。そのとき高適は蜀州刺史であり、嚴武に至っては西川節度使兼成都尹という蜀中の最高実力者であった。

高適は、杜甫が草堂の造営に当たった上元元年（七六〇）の秋に、彭州刺史から蜀州刺史に量移されている（孫欽善『高適集校注』「年譜」上海古籍出版、一九八四年）。次の二篇は、その頃の詩であろう。

王十七侍御掄（五）携酒至草堂奉寄此詩使請邀高三十五使君同到

王十七侍御掄 酒を携へて草堂に至るを許す 此の詩を奉寄して使ち高三十五使君の同（同）に到るを請邀す 杜甫

老夫臥穩朝慵起、白屋寒多暖始開。 老夫 臥して穩に 朝起きるに慵（かた）し、白屋 寒多くして暖に始めて開く。

江鸛巧当幽徑浴、鄰鷄還過短牆來。 江鸛 巧みに幽徑に当りて浴し、鄰鷄 還た短牆を過ぎて來る。

繡衣屢許携家醞、皂蓋能忘折野梅。 繡衣 屢しば許す家醞を携ふるを、皂蓋 能く野梅を折るを忘れんや。

戲假霜威促山簡、須成一醉習池迴。 戲れに霜威を假りて山簡を促す、須く一たび習池に酔ひて迴るを成すべし。

〔大意〕「侍御使の王掄は酒を携えて草堂を訪ねてくれると約束したので、この詩を送って、蜀州刺史の高適と一緒に来るように依頼した」この老いぼれは、のんびりと寝ころんで朝起き出すのも物憂く、粗末な家は寒いので、日が昇ってからやつと戸を開く。錦江のコウヅルは、ちゃっかりと人の通らぬ小径で水浴びをし、隣家の鶏は、低い土塀を越えてやって来る。繡衣の侍御使は、繰り返し自家製の酒を持ってきてくれると約束してくれた。黒い車蓋の車に乗る刺史殿は、どうして我が陋宅の梅を手折ることを忘れたりするものか。戯れに侍御使の威厳をもって、酒好きの刺史殿を促して、山簡がそこで酔いつぶれたという習家の池にも比すべき拙宅の池で、存分に酒を楽しんで帰ってもらいたいものだ。

王竟携酒高亦同過共用寒字

王 竟に酒を携へ高も亦た同に過る 共に寒字を用ふ 杜甫

臥病荒郊遠、通行小徑難。

病に臥して荒郊遠く、行みを通づるに小徑難し。

故人能領客、携酒重相看。

故人 能く客を領み、酒を携へて重ねて相ひ看る。

自愧無鮭菜、空煩卸馬鞍。

自ら愧つ 鮭菜無くして、空しく馬鞍を卸すを煩はすを。

移樽勸山簡、頭白恐風寒。

樽を移して山簡に勸むれば、頭白くして風の寒さを恐る。

〔大意〕「王掄は酒を携え、高適も一緒に草堂を訪ねてくれた。共に寒の韻字を用いる」成都の遠い郊外で病に伏している。私の草堂への小径は、歩くのも難儀だ。王掄は、高適を誘って、酒を携えて会いに来てくれた。魚菜の立派な持て成しもできないのに、わざわざ馬を繋ぐ手間を掛けることになった。酒杯を捧げ持って、山簡（高適）に勧めよう。君は白髪頭となって、きつと風の寒さも身に滲みるであろうから。（原注…高適はいつも私に向かって、お前は俺よりも年寄りに見えると言っていた。

そこでこの句で戯れた。

王掄と高適が杜甫の草堂を訪ねたのは、前詩「白屋寒、多暖始開」と後詩「頭白恐風寒」を見ると、寒さも加わる上元元年（七六〇）の晩秋の時期であろうか。

次に嚴武を招待した詩。嚴武が成都に成都尹・西川節度使（京銜は御史中丞）として成都に赴任したのは上元二年（七六一）一〇月である。⁽⁶⁾この時の嚴武の在蜀期間は短く、翌年宝応元年八月には離任して、兵部侍郎として長安に赴くことになる。以下に掲げる二篇は、前詩が宝応元年（七六一）の春、後詩は夏五月の作である。

嚴武と杜甫は、至徳二載（七五七）の夏、鳳翔の肅宗行在所で結識している。二人は共に房瑄党に属して、政治的に近い関係にあった。嚴武は、名家の出身（父嚴挺之は中書侍郎に終わる）であることも手伝って、この時、東川西川節度使を兼任して蜀全体の軍権を掌握し、また成都尹として成都府の民政を管轄する大官であった。その蜀の最高権力者である嚴武が、一介の在野の士に過ぎない杜甫の草堂を訪問したのであるから、そのこと自体が一つの事件と言っても良かった。

嚴中丞枉駕見過

元戎小隊出郊坰、問柳尋花到野亭。

川合東西瞻使節、地分南北任流萍。

扁舟不独如張翰、皂帽還應似管寧。

寂寞江天雲霧裏、何人道有少微星。

嚴中丞 駕を枉げて過らる

杜甫

元戎の小隊 郊坰に出で、柳を問ひ花を尋ねて野亭に到る。

川は東西を合して使節を瞻、地は南北に分れて流萍に任す。

扁舟 独り張翰の如からず、皂帽 還た応に管寧に似るべし。

寂寞たる江天 雲霧の裏、何人か道はん少微星有りと。

〔大意〕「御史中丞の厳武殿がわざわざお訪ねとなる」（原注に、厳武は東川節度使から西川節度使へと転じ、東川・西川双方の管轄を下命された。元帥は供回りを従えて成都の郊外にお出ましになり、柳と花の里を訪ねてわが野亭までやって来た。人も知るように、あなたは東川と西川の節度使を兼ねるが、自分は北から南に、浮き草のような流浪の身だ。小舟に乗って故郷に隠遁した西晋の張翰には及ばないが、黒い頭巾をかぶった三国魏の隱者管寧には似ているつもりだ。このうら寂しい川辺のモヤの立ち籠めるあたりに少微星（隱者の星）が潜んでいるとは、いったい誰がご存じだろうか。

厳公仲夏枉駕草堂兼携酒饌得寒字

厳公 仲夏に駕を草堂に枉げ 兼ねて酒饌を携ふ 寒の字を得たり 杜甫

竹裏行廚洗玉盤、花辺立馬簇金鞍。 竹裏の行廚 玉盤を洗ひ、花辺の立馬 金鞍を簇あむ。

非關使者徵求急、自識將軍札數寬。 使者の徵求 急なるに關するに非ず、自ら將軍の札数の寛なるを識る。

百年地僻柴門迴、五月江深草閣寒。 百年 地僻にして柴門まが迴に、五月 江深くして草閣寒し。

看弄漁舟移白日、老農何有罄交歡。 漁舟を弄して白日の移ろうを看る、老農 何ぞ交歡を罄くすこと有らん。

〔大意〕「厳武殿が陰曆五月に酒饌を携えて草堂に立ち寄られた」竹林の仮設えの台所で玉盤を洗って酒席を用意し、花木の下には金鞍を載せた馬がたむろする。節度使（厳武）は、無理に自分を召し出そうとしたりはしない、將軍（厳武）が鷹揚なお方と分かっていて、それで陋宅にお招きしたのだ。自分は生涯、うらぶれた所に柴の戸を結んでいるが、そのためか真夏でも、川風が吹いて草堂は涼しい。日が暮れるまで、ごゆっくり漁舟を眺めてください。さもなれば、百姓爺（杜甫）は友との楽しみを尽くすことができせんから。

杜甫はここで嚴武に対して、己れの仕進の希望も政治の抱負も封印して語ることなく、ひたすら隠者・田父の役回りを演じている。すでに絶大な権力を握る、己れよりも遙かに若い友人に対して、杜甫が提供できるのは純粹な友情であり、また嚴武が持ちえない隠遁の自由だけである。杜甫が真に「純粹な友情」と「隠遁の自由」を持っていたかどうかは、ここで問題とはならない。この二つを提示することが、自分を最も魅力的に嚴武の前に差し出す方法であることを杜甫は十分に理解していたのである。——ちなみにこうした配慮された身構えも含めて、嚴武に対する杜甫の態度は、高適にはその老いをからかって「移樽勸山簡、頭白恐風寒」と軽口を交えるのと一線を画して、慎重である。これは高適との間には早年に布衣の交わりを結んだ気楽な友情があるのに対して、毛並みが良くて苦勞知らずの嚴武⁽⁷⁾には遠慮が先に立ったためであろう。

杜甫はこうして、高適や嚴武のような蜀中の実力者を含めて、多くの人士を草堂に招いた。このことは、草堂が人を招いて羞ずかしくない立派な構えを持つことの証左でもある。草堂はとかく想像されるような、杜甫の家族と下僕を雨露から守るに足るだけの簡素な茅葺きの小屋ではなかった。この立派な草堂は、杜甫一人の力で造り得たものではなく、多くの人々の支援が必要だった。であればこそ杜甫には、草堂落成の暁には、支援を提供してくれた人々を招く義理もあったことになる。

こうして草堂の造営をめぐっては、多くの人々が杜甫に支援を提供し、その出来上がった草堂に、杜甫はその人々を招待するという循環が成立していたことになる。杜甫はこうした交遊関係を通して、成都の地域社会に人脉を扶植し、そこに自らの生活空間を確立してゆくことになる。

三 草堂の文学

もつとも、立派な屋敷に人を招いて歓待するだけならば、高禄を食む官僚ならば、また在地の富豪であつてもできることである。杜甫には、自分を特別なものとして提示する工夫が必要となつた。

杜甫は己れの草堂を、閑けさに満たされた安らぎの世界として描き出す。確かに錦江のほとりの「林塘の幽」〔二卜居〕詩〕に営まれた草堂は、「塵事」から隔てられた清浄境であつたに違いない。しかしそのような立地は、見方を変えれば草深き城外の場末に過ぎず、都会の刺戟に慣れた者には、単に活力を欠いた、退屈な世界であつたかも知れない。それをひたすら美的な価値の世界として描き出したのは、杜甫である。草堂の世界が事実どのようなものであつたかも重要であるが、それ以上に、杜甫がそれを如何なるものとして描き出そうとしているかに注目しなければなるまい。

なぜ草堂は幽雅であるのか。その理由は、蜀という水と光に恵まれた温和な天府の地にあり、しかも成都という「名都会」〔成都府〕詩〕から遠からず近からずの程良い立地に位置するからだと考えるだけでは、即物的に過ぎるだろう。それならば華北の異なる風土に営まれた初唐の宮廷詩人宋之間の別業を引き継いだ王維の輞川荘は、幽雅ではなかつたのか、また杜甫が親友の鄭虔とともに二度にわたって訪れてその美しさを讚美した、長安の韋曲に置かれた何將軍の山林は、幽雅ではなかつたのか。草堂は、その風土や立地条件のゆえばかりではなく、むしろ第一に、それを美しく描こうとした杜甫の詩のゆえに美しかったと考えるのが適當なのである。

草堂の美を綴つた詩は枚挙に暇がないが、いま一例として「江頭四詠」の連作を掲げてみよう。杜甫は、錦江（浣花溪）の畔りにある草堂の美しさを、「江頭」の四つの風物に代表させる。花からは「丁香」と「梔子」、鳥からは

「瀟灑」と「花鴨」が選ばれ、花鳥の調和の取れた配列の中で、草堂を包み込む幽雅な世界を浮かび上がらせる。個別の美を描いて個別の中に完結させるのではなく、それらを束ねることによって草堂全体の美しさを描き出すことに、杜甫の意図はある。

○江頭四詠 丁香 杜甫

丁香體柔弱、亂結枝猶墊。細葉帶浮毛、疏花披素豔。
深栽小齋後、庶使幽人占。晚墮蘭麝中、休懷粉身念。

○江頭四詠 梔子 杜甫

梔子比衆木、人間誠未多。於身色有用、与道氣相和。
紅取風霜実、青看雨露柯。無情移得汝、貴在映江波。

○江頭四詠 鸚鵡 杜甫

故使籠寬織、須知動損毛。看雲莫悵望、失水任呼號。
六翮曾經剪、孤飛卒未高。且無鷹隼慮、留滯莫辭勞。

○江頭四詠 花鴨 杜甫

花鴨無泥滓、階前每緩行。羽毛知獨立、黑白太分明。
不覺群心妒、休牽衆眼驚。稻梁霑汝在、作意莫先鳴。

草堂を世界をこのように美しく詩に描くことで、草堂ばかりではなく、そこに住まう杜甫自身を慕わしく魅力的

な人物へと造形しようとする。官僚の権力も人脈も持たず、また盛族としての家産を持つこともなく、殆ど着の儘で家族を伴って成都に身を寄せる杜甫には、その土地の人々の配慮と支援が不可欠だった。⁹⁾ そのためには、単に自らの境遇の悲惨を訴えて同情を惹くだけでは不十分であることを、杜甫は秦州・同谷を辿る絶望的な行旅の体験の中で学習していた。

杜甫は、塵事から隔てられた美しい草堂の住人として、自らを描き出そうとした。しかもその人物は、しばしば隠者とも呼ばれるような、単に不遇な知識人のようではなかった。長安の都では「三大礼賦」の作者として玄宗に一目置かれたことのある人物であり、また供奉官として肅宗皇帝に近侍するという天上の世界を経験した人物であり、そして左拾遺の諫官となつては宰相房琯を弁護して肅宗皇帝を面折した鯁骨の人物でもある。その人物がいま現に、成都の郭外に美しい草堂の世界を築いて隠遁している。そのように自己を詩中に提示した時に、杜甫は十分に魅力的な人格となつて、成都の人士たちを惹き付け始めるのである。

草堂を描いた詩、あるいは草堂で作られた詩が閑雅な情緒に満たされているのを読む時。草堂が、あるいは草堂の住人の心がそのように閑雅であつたと短絡するのではなく、杜甫がそのようなものとして草堂を描き、草堂の住人を描き出したことを思わなければならぬだろう。「草堂の住人が作る文学」は、事実の有りの儘を反映した文学なのではなく、杜甫によつて新しく創造され、文学史に新たに付け加えられた、新種の文学だったのである。

四 草堂卜居の主人

杜甫が創り上げた「草堂の住人が作る文学」も、成都の草堂があつてこそ初めて可能になる。今後の杜甫研究の重要な課題が、その新しい文学の由来と性格を考えることであるのは確かであるが、ここでは一歩退いて、なぜ成

都に限って草堂の造営が可能になったのかという基本問題を考えることにしたい。⁽¹⁰⁾

杜甫の草堂は、杜甫一人の力(資力・体力・気力)によって造られたものではない。その草堂は、家族数人(妻・子・弟⁽¹¹⁾・下僕ら)がようやく住めるような、貧士の、狭くて粗末な茅葺きの小屋ではなかった。母屋となる「茅屋」以外にも、いくつかの離れとも言うべき「亭台」があり、またそれ全体を包み込む大きな園林を備えるものであったこと、またその大きな規模ゆえに、造営には上元元年(七六〇)から宝応元年(七六二)まで二年余りの時間が必要だったことは、次の、原注によれば梓州の地で成都の草堂を思つて作られた詩に明らかである。

寄題江外草堂 杜甫

……誅茅初一畝、広地方連延。経営上元始、断手宝応年。敢謀土木麗、自覚面勢堅。亭台隨高下、敞豁当清川。惟有会心侶、数能同釣船。……

〔大意〕 草堂を造った時、初めは一畝の地に茅葺きの家を設けたに過ぎなかったが、隣には広い地所が続いていた。上元の初めから造り始め、今この宝応の年になって仕事を終えた。造作の華美を競うつもりはないが、しっかりとした出来映えとなった。

亭や台は、土地の起伏を利用して建てられ、広々とした川が目の前に開けている。心の通い合う友が来た時には、何度か小舟に乗って遊んだものだ。

草堂は、相当の規模となることを予定し、あらかじめ相応の敷地を用意して着工された。「誅茅初一畝、広地方連延」とは、当初に造った茅屋こそ、さしあたり家族が住まうために急拵えたものであったが、ゆくゆくは広い敷地を生かして草堂は整備されるべきものであったことを、杜甫自身が説明したものである。

杜甫の詩を読むと、支援者たちは、様々なものを杜甫のために提供したことが判明する。

成都府の司馬（従四品下）という官にあり、杜甫の縁者（表弟）でもあった「王十五司馬」は、茅屋を建てるための資金を用立ててくれた（王十五司馬弟出郭相訪兼遺營茅屋贊）。そして「蕭八明府堤」「韋二明府續」「何十一少府邕」「韋少府班」「徐卿」の面々からは、それぞれ「桃の苗木」「綿竹」「檜木の苗木」「松樹の苗木」「果樹の苗木」を受け取った。桃の苗木だけでも百本あったのだから、草堂の敷地の広さは相当のものである。これらは数年後には草堂のゆつたりとした庭園を美しく色取るはずであった。また「韋少府班」には、松の苗木の他に大邑の窯で焼かれた碗を所望した。それは当時の最先端の技術で焼かれた薄くて硬質な白磁であった。それは草堂に大事な客を迎えた時に、食卓に並べられるものだろう。杜甫は彼らの多方面の支援を得て、草堂の整備を進めた。¹²⁾

このうち、茅屋そのものの建築費（の一部）を用立てたのが司馬の王十五司馬であり、彼の助力は格別に大きかった。他の支援者が「明府（縣令）」「少府（県尉）」といった成都近隣の縣官である中で、王十五司馬だけが成都府の司馬という別格の官にあり、しかも杜甫と姻戚関係でもあるので、彼が草堂造営の発起人となり、協賛者たちが応分に支援したものであろうか。その王十五司馬に宛てた詩を読んでおきたい。

王十五司馬弟出郭相訪兼遺營茅屋贊

王十五司馬弟 郭を出でて相ひ訪ね 兼ねて茅屋を営むの質を遺る 杜甫

客裏何遷次、江辺正寂寥。 客裏 何ぞ遷次せる、江辺 正に寂寥たればなり。

肯來尋一老、愁破是今朝。 肯て来たりて一老を尋ぬ、愁の破るるは是れ今朝。

憂我營茅棟、携錢過野橋。 我が茅棟を営むを憂へて、錢を携へて野橋を過ぐ。

他郷唯表弟、還往莫辭遙。
他郷 唯だ表弟、還往 遙きを辭する莫かれ。

〔大意〕 成都の旅人が、今なぜ住処を移すのか、それは錦江の畔りが人事の煩いもない閑静な土地だからだ。あなたはこの老人をわざわざ訪ねてくれた、愁いが晴れたのは、正しくこの朝だ。私が茅屋を造るのを心配して、お金を持って、錦江の橋を渡ってきた。他郷で頼りとなるのは表弟のあなただけなので、往復が遠いのを決して厭わないうで欲しいのだ。

王十五司馬が茅屋の建築費を用立ててくれた時、杜甫はすでに錦江の畔りに立地を定めていた。この詩を見る限り、杜甫はもうその地に移り住んでもいて、王十五はそこを訪ねて来たように見える。もしそうでなければ王十五司馬は、杜甫が寄寓する仏寺の宿坊に訪ねたことになるが、詩には仏寺の気配はない。いずれにしても杜甫には茅屋造営の計画がすでに出来上がっており、その一部の援助を王十五司馬が申し出立たというのが実態であろう。

* * * * *

振り返れば、杜甫が草堂の取得を求めたのは、この成都ばかりではなかった。華州司功參軍を免ぜられて、秦州さらに同谷へと放浪を続けていた時にも、杜甫は行く先々で終の棲家となるべき草堂のために土地を物色していた。それが何故に成都において初めて草堂を営むことになったのかを考えてみる必要がある。

秦州では、姪の杜佐が住む東柯谷に住むことも考えた。「秦州雜詩二十首」其一六には、その計画が吐露されている。

東柯好崖谷、不与衆峰群。落日邀双鳥、晴天卷片雲。

野人矜險絶、水竹会平分。采藥吾将老、兒童未遣聞。

〔大意〕 東柯谷は、良いところだ。平凡な山とは気配が異なる。日が暮れようとする時、鳥は相携えて帰ってくる。そして晴れた日には、一片の雲がそらを漂う。土地の人は、深い山で世間と隔てられていることを自慢する。川と竹の美しい景色を、自分も公平に分けて貰おうことにしよう。自分は葉草を採りながら、ここで老いを迎えるのだ。しかしこの素晴らしい計画を、しばらく子供には内緒にしておくつもりだ。

秦州では西、枝村の^一帯でも、長安以来の知人である贄上人の助けも借りて、草堂の用地を探して回っている（西、枝村、尋置草堂地夜宿贄公土室二首）。しかし杜甫は秦州では草堂取得を決断できず、同谷へと向かうことになる。同谷の方が、秦州よりも条件が良いと聞かされたためである。秦州を発して同谷に至る一二首の紀行詩の第一〇首「積草嶺」詩には原注があり「同谷縣界」と記す。いよいよ同谷縣の界に入るときこの作を読んでみよう。

連峰積長陰、白日遞隱見。颯颯林響交、慘慘石狀變。

山分積草嶺、路異鳴水縣。旅泊吾道窮、衰年歲時倦。

卜居尚百里、休駕投諸彥。邑有佳主人、情如已会面。

來書語絕妙、遠客驚深眷。食蕨不願余、茅茨眼中見。

〔大意〕 高い峰が続いて、雲が天を覆っている。太陽は、時折姿を見せるだけだ。ひゅーひゅーと風に林が鳴り、ごつごつと岩は異様な姿を見せる。この積草嶺が、同谷縣への境界。違う道を行けば、鳴水縣となる。辛い旅で、わが道は出口のない袋小路、老いぼれて、また一年が終わろうとするのにうんざりだ。自分の住居を持つまで、あと百里の道のり、着いたらば土地の紳士に身を寄せて、旅装を解くのだ。邑には立派な主人がいて、旧知の友のように自分を心配してくれる。手紙をくれたが、文面は親

切そのもので、遠く旅してきた者には感激の至りだ。蕨を食べれば満足で、それ以上は求めない。その主人の家が、もう見えてきたような気がする。

杜甫は「佳主人」の言葉を真に受けて、同谷に向かった。しかしそこで待っていたのは、真冬の季節の悲惨な耐乏生活であり（「乾元中寓居同谷縣作歌七首」等）、杜甫は一二月一日に、同谷を去って成都へと向かうのである。

要するに故郷と官職を失った杜甫は、身を落ち着ける草堂を求めながら果たせず、放浪のはてに成都まで辿り着いた。そしてこの成都も、秦州や同谷と同様の運命が待っていても不思議はなかった。そうならず済んだのは、単に偶然に過ぎない。

杜甫には、華州を旅立つときに用意した貯蓄も、成都に着く頃には殆ど残っていなかっただろう。しかも豊かな蜀の地を背景に持ち、長江漕運の起点として商賈が雲集する成都は、¹⁵ 辺境の秦州や同谷に比べれば、物価もかなり高かったであろう。成都で茅屋のための土地を買い求めることは、杜甫の独力をもってしては困難だったに違いない。成都の場合が、秦州や同谷と異なったのは、ひとえに、成都に限って杜甫の強力な支援者が現れたために他ならない。

成都の草堂は、草堂また茅屋の語が示す簡素さとは異なって、いわば別業にも匹敵する規模を持つものであった。それゆえに問題となるのは、そのような本格的な草堂の造営が、なぜ計画可能だったかである。王十五司馬は茅屋の建築費用（「營茅屋貲」）を提供した。しかし土地の選定と取得という草堂造営の最大の懸案については、¹⁶ 王十五司馬に如何なる貢献があったかを伝える資料はない。「營茅屋貲」の提供が特記されているという一方の事実は、より重大な土地の提供では、王十五司馬の関与がなかったことを示唆するものとなる。

こうした土地取得という最大懸案についての杜甫の詩の空白は、他の具体的細部が克明に描かれているだけに建

築費用や樹木・盜器の提供、意図された空白であることを思わせる。すなわち草堂造営の全体の青写真を描いた人物が、名を伝えられた王十五司馬以下の人々以外に存在している可能性がある。

五 裴冕の可能性

論点を整理すると、以下のようになる。王十五司馬は、茅屋建築資金の提供者であった。しかし、

- ① 王十五司馬が資金を携えて杜甫を訪ねた時、杜甫にはすでに錦江の畔りに草堂を営む計画が用意されており、あるいはすでに仏寺の寓居を出て、新しい草堂に移居していた可能性がある（王十五司馬弟出郭相訪兼遺營茅屋贊」詩はそのように読める）。とすれば、王十五司馬の提供は建築資金の一部補填であり、それを待たずに建築は進められていた可能性もある。

- ② 草堂造営の最大の懸案は、土地の購入である。杜甫がかつて秦州で草堂を営もうとした時、まず考えたのは土地の購入であり、長安以来の知人で土地勘のある賛上人に連れられて現地を物色して歩いてもいる（西枝村尋置草堂地夜宿贊公土室二首」。成都の草堂の場合も、草堂建築の前にまず土地の選定と購入の準備があったはずである。そしてそれは王十五司馬の資金提供に先立つ時期に行われていた。土地の選定・購入の段階で、杜甫を強力に支援する人物がいたはずであり、それは王十五司馬以外の人物である可能性が高い。

- ③ 草堂の土地は、茅屋を建てるに必要な最小限の狭隘なものではなく、周囲の園林の整備を念頭に置いた大規模のものである。その土地の取得には、相当の資力を持つ人物の支援がなければならない。

- ④ その人物は、恐らく王十五司馬と連絡しながら杜甫の支援に当たっており、さらには、成都近隣の縣官たちが

整然と杜甫の援助に参加していることを見ると、彼らに直接連絡を取りうる立場にあった可能性が高い。

そのような人物が、王十五司馬その人である可能性もないではない。しかし王十五司馬が茅屋建築の資金提供者として特記されていることは、却って、土地の提供者ではなかったことを示唆している。また成都府司馬（従四品下）はそれなりの大官ではあるが、成都近隣の縣官たちは、府・県の指揮系統において、成都府司馬の王十五に顧使される立場にはない。複数の縣官たちが整然と杜甫の援助に赴いたことには、王十五司馬よりもさらに上級の人物の働き掛けが推定されるのである。

そのような人物が、当時の成都にいたとすれば、裴冕であろう。裴冕は、肅宗の乾元二年（七五九）六月に成都尹・劍南西川節度使として成都に赴任し、翌年三月に李若幽と交代して離任している⁽¹⁷⁾。杜甫が成都に到着したのは、乾元二年の一二月、それは裴冕が成都尹・劍南西川節度使に在任している時期である。

六 「鹿頭山」の詩

杜甫が成都到着を目前にして作った「鹿頭山」詩の末尾に裴冕への讃辞を書き綴るのは、杜甫が裴冕の動向を正確に把握していたことを示すものである。

鹿頭山

鹿頭何亭亭、是日慰飢渴。

鹿頭 何ぞ亭亭たる、是の日 飢渴を慰めん。

連山西南斷、俯見千里豁。

連山 西南に斷へ、俯しては見る千里の豁^{びろ}きを。

鹿頭山

杜甫

遊子出京華、劍門不可越。

遊子 京華を出づるも、劍門 越ゆ可からず。

及茲險阻尽、始喜原野闊。

茲に及んで險阻尽き、始めて喜ぶ原野の闊きを。

殊方昔三分、霸氣曾聞発。

殊方 昔 三分し、霸氣 曾て聞ま発せり。

天下今一家、雲端失双闕。

天下 今 一家、雲端 双闕を失ふ。

悠然想揚馬、繼起名碑兀。

悠然として揚馬を想ふ、繼起して名 碑兀たり。

有文令人傷、何処埋爾骨。

文有るも人をして傷ましむ、何れの処にか爾が骨を埋める。

紆余脂膏地、慘澹豪俠窟。

紆余 脂膏の地、慘澹 豪俠の窟。

仗鉞非老臣、宣風豈專達。

鉞に仗ること老臣に非ずんば、風を宣べんこと豈に専ら達せん。

冀公柱石姿、論道邦国活。

冀公 柱石の姿、道を論じて邦国活く。

斯人亦何幸、公鎮踰歲月。

斯の人 亦た何ぞ幸ひなる、公の鎮して歲月を踰ゆ。

〔大意〕

鹿頭山は高く聳え立つ。今ここに立つ時、自分はやつと饑渴の難儀から救われるのだ。連なる山並みも、西南の方角に

姿を消し、見下ろせば千里の彼方に眺望が開ける。自分は長安を旅立ったものの、劍門の難所をなかなか越えられなかった。し

かしこまで来て険阻な道程も終り、平野が広がっているのを嬉しく思う。この世界の片隅では、かつて天下三分の一方にあり、

覇者の気がしばしば立ち籠めたものだ。しかし今は一つの国となって、雲のかかる山に設けた劍閣の関所もその意味を失った。

遙かその上の揚雄と司馬相如を憶い出す。二人の文名は相繼いで屹立した。二人の文学は今に伝わるのに、嘆かわしくは、その

骨は何処に埋められたものか。涯もなく広がるうまし豊饒の土地、雄飛の野望を抱いた豪傑たちの屯するところ。鉞を手に仁王

立ちする老臣でもなければ、この地を治めることも難しかろう。冀国公の裴冕殿は国家の柱石、道理を語って、国は平和に治め

られる。この土地の人々は、何と幸いなことか。あなたがここを治めて、もう一年余りにもなるのだ。

この「鹿頭山」詩は、「発同谷縣」詩(18)から「成都府」詩まで、すなわち同谷を発つて成都に至る険しい蜀道の道程を描いた一二首からなる成都紀行詩の、第一一首目である。鹿頭山が蜀道の最後の難関であり、そこを越えれば一望千里の成都平野の中に山並みは吸い込まれるように姿を消す。この詩が描く「連山西南斷、俯見千里豁」という光景は、三峡の出口に当たたる荆門において兩岸の山並みが消えてゆくのを李白が「山隨平野尽、江入大荒流」〔渡荆門送別〕詩と描いたのと、好一对と言つても良からう。それは正しく、成都の町を間近に予感しつつ蜀道の旅を締めくくるものである。⁽¹⁹⁾

注目したいのは、この詩の末尾に現れる「冀公」すなわち冀国公の裴冕である。裴冕はこのとき、成都に本宮を置く西川節度使にして成都尹を兼ね、いわばこの地域の最高権力者であつた。冀公（裴冕）が現れるのは最後から四句目であるが、その伏線はさらにその四句前まで遡る。「紆余脂膏地、慘澹豪俠窟。仗鉞非老臣、宣風豈專達。冀公柱石姿、論道邦国活。斯人亦何幸、公鎮踰歲月」この豊饒な土地が広がり、野心的な人材の巣窟でもある蜀の地は、強大な権力を持った老臣でなければ統治することができない。裴冕こそは、国家の柱石としてその能力を備えた人物であり、その人によって歳余に亘つて統治された蜀の民衆は幸福である、このように裴冕の功績を讚美するのである。それにしても叙景を主体とする一連の成都紀行詩の中にあつて、「鹿頭山」詩の末尾に現れる裴冕の讚美は余りにも唐突である。

この十二首からなる成都紀行詩は、いつどの様にして作られたのであろうか。常識的にはその旅程の最中に、その場所において作られたものである。つまり龍門山の閣道を過ぎた時に「龍門閣」詩を作り、劍門を通つた時に「劍門」詩を作り、そして鹿頭山を越えた時に「鹿頭山」詩を作つたのだと。確かに杜甫は、その時どきの体験に触発されて得られた詩句を、その場で書き留めていたに相違ない。しかしそれは、後日に詩篇を完成させるための手掛

かりであり、その時に立ち止まって詩篇を成すことを意味しない。言うまでもないことだが、「百年不敢料、一墜那得取」（百年の命を思う余裕はない、足を踏み外したらばそれで終わりだ）と描かれる龍門山の閣道の途中で立ち止まり、側らに停めた家族と家財を載せた車のことを忘れて、杜甫が秃筆を捻る様子を思い浮かべることは、意味のあることではない。この紀行詩は、成都で旅装を解いた後に、満を持して完成されたものと考えざるべきものであろう。こうして「鹿頭山」詩の末尾に現れる「冀公二裴冕一」の讚美は、偶然の産物ではなく、周到な配慮の結果となる。蜀道の險阻が尽き果て、眼下に成都平野が一望できる鹿頭山の地点こそ、その成都平野を光被する「冀公二裴冕一」の威徳を讚美するのは最も相応しい場であり、これ以外の場を求めるとは困難である。——この成都紀行詩は、古来名高い險阻な蜀道の光景を实地に描き切ることを主題に据えた画期的な文学である。杜甫は、作中に裴冕の名前をしかと書き込んだ上で、その野心的な文学的成果を手土産に、成都の実力者である「冀公二裴冕一」に干謁した。そもそも「鹿頭山」詩と、これを含んだ成都紀行詩は、直接の動機に即して言えば、裴冕に支援を期待して、彼に対する干謁の作として制作されたものに他ならなかった。

制作の場は、成都の当初の寓居となった仏寺の宿坊である。杜甫はそこで裴冕の評判を聞き知って、同谷成都紀行詩の第一首「鹿頭山」に裴冕讚美の言辞を織り込むことになった。

※ 附言すれば、杜甫の接触は裴冕を頂点として、様々な方面に向かったものと思われる。成都府に勤める表弟の王十五司馬にも、直ちに成都到着の知らせを入れたはずである。合理的に推測すれば、杜甫は、裴冕の直属の部下である王十五司馬を通して、裴冕に干謁したものと思われる。成都尹の裴冕にとって、側近は長史について司馬であり、裴冕と王十五司馬はいわば毎日顔を合わせる関係にあった。また成都の北五〇キロ余りの彭州の刺史であった高適にも成都到着をすぐに伝えたはずであり、高適から返事の詩も間もなく届いた。本稿の冒頭に掲げた杜甫の「酬高使君相贈」詩は、その時の酬答の作である。

杜甫の接触に対して裴冕がどのように反応したか、それを示す資料は残っていない（従って以下の推論は、すべてが推測の議論である。しかし推測の議論は、それ以外にあり得ない論理の必然に導かれるものであり、単なる空論ではない）。しかし裴冕の反応を考える前に、これに先立つ杜甫と裴冕との関係を整理しておきたい。

裴冕（?～770）は、天宝の初め、門蔭によって渭南縣尉となる。御史中丞の王鉞に賞識されて殿中侍御史となる。河西節度使哥舒翰に辟召されて行軍司馬となる。天宝一五載（七五六）、蜀に蒙塵した玄宗によって御史中丞に任ぜられ、太子李亨に侍従する。杜鴻漸らと説いて、太子を即位（肅宗）させ、中書侍郎として宰相職に当たる。戦費調達のために官爵や仏僧道士の資格を売ったが、その施策を批判され、七五七年三月、宰相職を解かれて尚書右僕射となる。長安・洛陽が回復された後（七五八）、冀国公（実封五百戸）に封ぜられ、乾元二年（七五九）六月に成都尹・劍南西川節度使として成都に赴任する。翌年三月、李若幽と交代で長安に召還されて、尚書右僕射に就任。七六二年九月、施州刺史に左遷され、数箇月にして澧州刺史に量移され、七六四（広徳二年）二月、その後尚書左僕射兼御史大夫として召還される。

杜甫が裴冕と間近かにいたのは、鳳翔の行在所に杜甫が馳せ参じた至徳二載（七五七）五月以降、また杜甫が華州司功參軍に左遷された乾元元年（七五八）六月以前の約一年間である。杜甫は、房瑄黨の人物として上皇（玄宗）に連なる立場にあり、裴冕は、肅宗を皇帝に推戴した張本人として肅宗与党の、相対立する人脈にあった。しかし裴冕はこの時すでに宰相職を免ぜられて閑職にあり、心理的には、肅宗与党としての意識は薄らいでいた可能性が高い。

裴冕は、この杜甫のことを確実に認識していた。杜甫は至徳二載五月一六日、長安を脱出して鳳翔の行在所に駆け付け、左拾遺（従八品上）に拔擢されている。品階は低い、供奉官として尊重される官であり、注目の人事で

あっただろう。しかも杜甫は就任早々に、房琯が宰相を罷免されたことに抗議して諫言し、肅宗の逆鱗に触れる。尚書省の刑部・御史台・代理寺の三司合同の査問委員会にかけられて、極刑の可能性もあったが、宰相張鎰・御史大夫韋陟また崔光遠・顔真卿等の弁護によってかろうじて許されるという大事件を起こしている。裴冕は、房琯の宰相罷免が自分自身の境遇と相い類することも手伝って、必ずや杜甫の存在を認知することになった相違あるまい。——とは言え、裴冕は宰相も経験したことのある肅宗朝の権臣、一方の杜甫は異例の拔擢をもって左拾遺となつた新参者、両者の間に親交があつた可能性はないだろう。

しかし華州司功参軍を免ぜられ、官職を失つて放浪のはてに成都に辿り着いた杜甫にすれば、この成都の最高権力者は、今や「大切な知人」となつていたのである。

七 「主人」裴冕」説の可能性

本稿は、杜甫の草堂造営に当たつて、裴冕が中心的な支援者であつたことを予想する立場にある。そしてそのような考えを持つ論者（杜詩注釈者）は、従来、決して少なくはなかつた。このこと自体が、「裴冕」草堂造営の支援者」という推測が奇想天外な思い付きではないことを保証するものである。

杜甫の詩で裴冕に明示的に言及するのは「鹿頭山」詩のみであり、肝腎の草堂造営にまつわる詩にその名前が現れることはない。裴冕がいるとすれば、固有人名を用いない表現の中に潜んでいることを考えなければなるまい。草堂造営時期の詩で、不特定者を示す「主人」「故人」の語を用いた詩を書き出してみよう。まず「主人」の例。

卜居

卜居

杜甫

浣花溪水水西頭、主人為卜林塘幽。

浣花溪水 水の西頭、主人 為に卜す林塘の幽。

已知出郭少塵事、更有澄江銷客愁。

已知る 郭を出でて塵事の少きを、更に澄江の客愁を銷す有り。

無数蜻蜒齊上下、一双鸂鶒對沈浮。

無数の蜻蜒 齊しく上下し、一双の鸂鶒 對して沈浮す。

東行萬里堪乘興、須向山陰入小舟。

東行 萬里 興に乗ずるに堪へたり、須く山陰に向ひて小舟に入るべし。

* * * * *

以下に示す三例は、支援者を「故人」と称したものである。

① 酬高使君相贈

高使君の相ひ贈るに酬ゆ 杜甫

古寺僧牢落、空房客寓居。

古寺 僧は牢落、空房 客は寓居。

故人供祿米、鄰舍与園蔬。

故人 祿米を供し、鄰舍 園蔬を与ふ。

双樹容聽法、三車肯載書。

双樹 法を聴くを容し、三車 肯て書を載す。

草玄吾豈敢、賦或似相如。

玄を草するは吾 豈に敢てせん、賦は或は相如に似たり。

この詩（前掲）は、杜甫が成都に到着してほどない時期の作である。杜甫はまだ仏寺に寓居して、草堂の造営に着手していない。日用の米は「故人」が提供してくれるし、蔬菜は隣近所が届けてくれる。周囲の人々の支えを得て、秦州や同谷の寓居にはなかつた安らぎがこの詩には感得される。——ところで仇注（卷九）は王嗣奭『杜臆』に「故人当指裴冕」とあるのを引用するが、「祿米」の提供ぐらいならば、あえて大官の裴冕を持ち出さなくても良からう。裴冕でも悪くないが、「故人」とあるので、杜甫と個人レベルの関係にある王十五司馬であつたほうが

② 狂夫

狂夫 杜甫

萬里橋西一草堂、百花潭水即滄浪。

萬里橋西 一草堂、百花潭水 即ち滄浪。

風含翠篠娟娟淨、雨裊紅蕖冉冉香。

風は翠篠を含みて娟娟と淨らかに、雨は紅蕖を裊なほして冉冉と香し。

厚祿故人書斷絶、恒飢稚子色淒涼。

厚祿の故人 書 断絶、恒飢の稚子 色 淒涼。

欲填溝壑惟疎放、自笑狂夫老更狂。

溝壑を填めんと欲して惟だ疎放、自ら笑ふ 狂夫 老ひて更に狂なりと。

〔大意〕 萬里橋の西なる小さな草堂、その旁らの百花潭こそ隱遁の世界を流れる滄浪だ。風は緑の笹を吹いて清らかにそよぎ、

雨は赤い蓮の花を潤して馥しい香りをくゆらせる。高祿を受け取る友人からは、便りが途絶え、いつも腹を空かせるわが子は、

元氣もでない。野垂れ死の間際にあるというのに、自分はずばら。自分でも、年取つていよいよ勝手氣儘になつてきたことに苦

笑を禁じ得ないのだ。

この詩では杜甫はすでに草堂に住んでいる。「紅蕖」が咲いているから、もう夏になっている。仇注（卷九）はやはり王嗣奭『杜臆』を引用して「故人必有所指、但謂裴冕、則非。堂既成後、冕方去蜀也」とする。裴冕は、三月に後任の李若幽と交代して長安に帰っている、穏当な判断である。また前述のように、裴冕のような大官に「故人」の称は相応しくないだろう。

③ 江村

江村 杜甫

清江一曲抱郵流、長夏江郵事事幽。

清江 一曲 郵を抱きて流る、長夏 江郵 事事幽なり。

自来自梁上燕、相親相近水中鷗。

自おんら去り自おんら來たる梁上の燕、相ひ親しみ相ひ近づく水中の鷗。

老妻畫紙為棊局、稚子敲針作釣鉤。

老妻は紙に畫きて棊局をつくり、稚子は針を敲たたきて釣鉤を作る。

但有故人供祿米、微軀此外更何求。

但だ故人の祿米を供する有り、微軀 此の外に更に何をか求めん。

〔大意〕 清んだ錦江が、村を抱きかかえるように流れ、夏の日は、川辺の村は何もかもひっそりと静まりかえる。梁に巢をかけ

た燕は、飛び去つてはまた來たり、水を泳ぐ鷗は、どもまでも人に近寄つてくる。老妻は、紙に書いて棊盤を作り、わが子は針を敲たたいて釣り針を作る。友人が祿米を分けてくれるので、自分にはこれ以上何も要らない。

前の②「狂夫」と同じ頃の作である。同じく「故人」が現れ、しかもここではすでに「祿米」を受け取っていることから推測すれば、前詩②を「故人」に送り、その甲斐あつて返事の手紙と一緒に「祿米」が届けられたことをこの詩は綴るものだろう。——しかも成都当初の「酬高使君相贈」詩に「故人供祿米」とあるのと、この「江村」詩の「但有故人供祿米」とは同趣である。この三篇「酬高使君相贈」「狂夫」「江村」に見える、杜甫を心配して「祿米」を届けてくれる「故人」は、恐らく同じ人物である。強いて一人を挙げるならば、杜甫の表弟の王十五司馬であらうか。

これに対して、「卜居」詩の「浣花溪水水西頭、主人為卜林塘幽」に見える「主人」については、「故人」のような特定の交遊関係が前提とならず、また「祿米」の分与のような個別具体的な支援の内容が示されるのでもなく、至つて曖昧な言い方である。しかしそれでいて「主人」は、相手を尊者として重んずる文脈で用いられるべき語である。そのためであらう、従来の「裴冕＝草堂造営の支援者」説を唱える論者が最たる根拠とするのも、この「卜

八 「主人」裴冕」説の隆替

(1) 「主人」裴冕」説

『九家集注杜詩』卷二「卜居」の題下注に鮑慎由の説を次のように引く。「上元元年歲次庚子、公年四十九、在成都。劍南節度使裴冕、為卜成都西郭浣花溪作草堂居焉。所謂主人為卜林塘幽、是也。前注為嚴武、非是」。すなわち、劍南節度使の裴冕が、杜甫のために成都の西の郭外の浣花溪に草堂を造って杜甫を住ませたと見て、この「主人」を裴冕と判断した。ちなみに「主人」嚴武」を唱える前注とは、王洙注であるが、嚴武の成都尹着任は一年半後の上元二年（七六一）一〇月であるので、嚴武の可能性はない。

また黄鶴『補注杜詩』卷二「卜居」も、題下注に鮑慎由の説を同様に引用し、その上で黄鶴は「補注」において「公至成都時、裴冕為節度、已為卜居浣花溪上寺。今云「主人」指裴冕也」と述べて、「主人」裴冕」説を確認している。宋代の注は、逸名『分門集注杜工部詩』（卷七「卜居」・蔡夢弼『草堂詩箋』（卷一八「卜居」・逸名『千家注杜工部詩集』（卷七「卜居」）なども鮑慎由を引用することで揆を一にし、これより清朝に至るまで「主人」裴冕」説は通説の地位を保持することになる。

(2) 「主人」裴冕」説の否定

これに対して正面から異議を唱えるのは、清朝の朱鶴齡『杜工部詩集輯注』・仇兆鰲『杜詩詳注』である。

朱鶴齡『杜工部詩集輯注』には、まず鮑慎由の所見「主人、裴冕也。旧注作嚴武、非」を引用し、これを次のよ

うに反駁する。「按、『史』上元元年三月、李若幽代裴冕為成都尹、此云「主人」、恐只是地主、并非冕也」。すなわち史書には、上元元年三月に李若幽が裴冕と交代して成都尹となる記しており、草堂を造営中の三月には裴冕は成都を去っているのです。裴冕の可能性はない。この「主人」は、草堂の敷地の所有者を指すに過ぎない、というのが朱鶴齡の解釈である。——しかしこの朱鶴齡の解釈は、十分な説得力を持つものではない。草堂の造営が始まった時に裴冕が成都尹であれば、「主人」裴冕」説は成り立ちうる。その後成都尹が李若幽に交代しても、「卜居」詩はすでに作られているのである。しかも三月は、長安で李若幽が成都尹に任命された時であり、彼が着任するまで、裴冕はまだしばらく成都尹に留任していた。

一方、仇兆鰲『杜詩詳注』卷九「卜居」題下注は、朱鶴齡とは異なる観点から、顧宸の説を引用する形で「主人」裴冕」説に対する駁論を展開する。

按…顧（宸）注……黃鶴・鮑欽止皆云、劍南節度使裴冕為公卜成都草堂以居之。此說無據。裴若為公結廬、則詩題當特標裴翼公、而詩中亦不當以「主人卜林塘」一句輕敘矣。如王判官遺草堂贊、公必載之、又如嚴鄭公攜酒饌來、亦必亟稱之。何況為公卜居耶。其說不信矣。

黄鶴（『補注杜詩』）と鮑慎由（字は欽之）が言うには、劍南節度使の裴冕が杜甫のために草堂を作って住まわせた。しかしこの説には根拠がない。もし裴冕が杜甫のために草堂を造ったとすれば、詩題に裴翼公（翼国公裴冕）を明記すべきであり、また詩中でも「主人が林と池の間に草堂を造った」という軽い述べ方をすべきではない。王判官が草堂造営の資金を贈った時には、杜甫は忘れずにそれを記し、鄭国公嚴武が酒と料理を携えて訪れた時にも、

しっかりと述べている。まして杜甫のために草堂を造って住ませたのである。この裴冕説には、信憑性が⁽²⁶⁾ない。――仇兆鰲は顧宸の説を引いて、杜甫が友人の恩義を忘れず、詩に具体的にその恩義を書き記す篤実な人物であることを具体例をもって指摘して、「主人＝裴冕」説を否定する。朱鶴齡以上に説得力のある反証となっている。仇兆鰲はここからさらに進めて、独自の「主人＝草堂の主人となる杜甫自身」説を次のように提唱している。

主人公自謂。為卜者、為此而卜居也。此從浣花溪敘入、即可稱「花溪主人」、後歸成都詩云「錦里逢迎有主人」亦可稱「錦里主人」矣。

「主人」は、杜甫自身のことを言う。「為に卜す」とは自分のために住いを造ることである。この詩は浣花溪を端緒とするから、杜甫はいわば「花溪の主人」である。また後年、久し振りに成都に帰ってきた時に「錦里の逢迎に主人有り」と述べているので、これならば「錦里の主人」となるだろう。――仇兆鰲は、「錦里逢迎有主人」(將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首)其二の「主人」が確実に「草堂の主人である杜甫自身」のことを指す用例であることを示しつつ、「卜居」詩の「主人」も杜甫自身を指す用法であることを証明しようとするのである。情義の人である杜甫が、裴冕が草堂の造営者であるならば彼の名を逸するはずはないという指摘、また自身を草堂の主人とする確かな可能性の指摘、しかも加えて仇注一般の影響力の大きさも手伝って、この「主人＝草堂の主人となる杜甫自身」説は、今や有力説となった感がある。仇注に異を唱えることをもって快意とする浦起龍『読杜心解』も「卜居」(卷四之二)では「黄・鮑皆云、劍南節度為公卜居。無據」と述べ、「仇注…主人、自謂」と相述するのは、その影響力の一端を示すものである。

仇兆鰲の説は、便宜的に二つに分けて整理しておきたい。一つは、「主人〓裴冕」説の否定、もう一つは「主人〓杜甫自身」説の提唱である。このうち前者は定説としての地位を築く。また後者も、有力な説として継承される。²⁸このうち「主人〓裴冕」説の否定を、近代的な学術研究の中で確認・継承したのが、聞一多『少陵先生年譜会箋』(湖北人民出版社「聞一多全集」第六冊一六三頁)である。

王嗣奭『杜臆』は故人を裴冕と見るが、恐らくは正しくない。後に見える「卜居」詩に「主人為卜林塘幽」とあり、黄鶴・鮑慎由(字は欽之)らは皆な裴冕とする。顧宸曰く「裴冕がもし杜甫のために廬を結んだならば、詩題に冀公を明記するだろうし、詩中でも主人卜林塘の一句のような軽い扱いをしないだろう」。按ずるに、顧説は正しい。史書には裴冕は無学であり、財貨に貪欲と称され、その人と為りは鄙陋であった。杜甫の理解者ではなからう。後に「寄裴施州」詩があるが、朱鶴齡は別人であることを考証している。²⁹とすれば杜甫と裴冕は終始関係がなかったことになる。

馮至『杜甫伝』(人民文学出版社、一九五三年)も、聞一多を継承するようである。

杜甫が成都にきたとき、裴冕が成都尹で劍南西川節度使を兼ねていた。裴冕は玄宗の時に王鉞と結託し、晩年代宗のときにはまた李輔国と李元載に取入るといふ、手段をえらばず、ただ自分の出世のみを求めたたちの官僚で、また馬嵬事変後に六度も上奏して肅宗を皇帝の位に即くよう推戴した人物である。広い意味ではまさに房瑄およびその友人たちの反対党であった。杜甫の註釈者は杜甫がその詩句の中で再三再四『主人』とよび

かけているのはつまり裴冕のことだというのが、私たちはそれに同意すべき十分な理由をもっていない。ただ裴冕の幕僚のなかに杜甫の友人親族がいたということはありうる。たとえば彼のいとこ孫杜濟こそ裴冕の側近で日の出の勢いだったから、これらの親族は多少とも彼に若干の経済的援助をしたことであろう。杜甫は裴冕との直接の交際はなかったにせよ、裴冕の支配地域内に来たからには、紀行詩「鹿頭山」のなかに四句の詩で裴氏へつらわぬわけにもゆかず、こうした心づかいはいとも憐れというほかない。だが彼が成都についてのちはもはや一句でも裴冕に関係したものは見あたらない。それに裴冕は翌年（七六〇）三月には成都を去り、李若幽が成都尹の後任となっているのである。（橋川時雄訳「杜甫——詩と生涯」一五一頁、筑摩叢書一九七七年）

(3) 再び「主人」裴冕一説

朱鶴齡・仇兆鰲から聞一多へと「主人」裴冕一説の否定論が力強く継承されながらも、これが定説として確乎たる地位を築くには至らなかつた。むしろ近年になって、「主人」裴冕一説はやや復活しつつあるようでもある。

次に挙げる蕭滌非『杜甫研究・下巻』一〇五頁「卜居」（山東人民出版社、一九五六年）は、積極的に「主人」裴冕一説を唱えるものではないが、仇兆鰲の「主人」杜甫自身一説を否定して、裴冕もしくは裴冕に相当する成都の実力者を想定する。裴冕を明示する資料が存在しない以上、蕭滌非説は、学問的客観性を遵守しつつ最も「主人」裴冕一説の近くまで踏み込んだものと言っても良からう。

主人は、黄鶴らは劍南節度使裴冕を指すと見る。しかし顧宸はこの説に根拠はないとして、「もし裴冕が杜甫のために草堂を造ったとすれば、詩題に裴冀公（冀国公裴冕）を記すべきであり、また詩中でも「主人が林

と池の間に草堂を造った」という軽い述べ方をすべきではない」と主張する。仇兆鰲は以下のように述べる。

「主人」は、杜甫自身のことを言う。「為に卜す」とは自分のために住いを造ることである。この詩は浣花溪を端緒とするから、杜甫はいわば「花溪の主人」となる。また後年、久し振りに成都に帰ってきた時に「錦里の逢迎に主人有り」と述べているので、これならば「錦里の主人」となるだろう」と。按ずるに、作品全体の語気を読めば、「主人」は特定の人物を指すものだろう。また杜甫が成都に到着した直後は、貧窮していたに相違なく、林塘は閑静だったとしても、独力で草堂を造ることは難しだろう。主人は、裴冕と決まったものではないが、そうした人物がいたはずであり、杜甫自身を指すとは到底思えない。(杜甫は草堂で、一花一木、すべて詩を作ってそれと引き替えに人々から調達している。このような条件の良い立地を、どうして杜甫が好き勝手に占領できるものか)。

また「主人」裴冕」説を最も熱心に主張するのは陳貽焮『杜詩評伝・中巻』六四三頁(上海古籍出版社、一九八八年)である。

「卜居」の第二句「主人為卜林塘幽」について、黄鶴と鮑欽之らは杜甫のために卜居した「主人」は「故人供禄米」(松原注・杜甫「酬高使君相贈」詩)の「故人」と同じで、裴冕だとする。⁽³⁰⁾顧注(松原注・仇注所引)は、この説には根拠がないとする。仇注は「主人」を杜甫自身と見る。施鴻保(松原注・「說杜詩說」卷九)が「今按ずるに、杜甫が同谷にあって非常に窮乏し、妻子を伴ってはるばると蜀までやってきた。故人が少し禄米を提供したぐらいで、草堂を作るだけの資力が持てるものだろうか。黄鶴・鮑欽之の説は間違いとは言い切れまい。

たとい裴冕がひとりで草堂を造営したのではないとしても、まず資金を提供した、だから王司馬が同調して杜甫を助け、蕭・韋の二人の明府や、何・韋の二人の少府も桃や橙の苗木を探して持って来てくれたのも、恐らく上官の意を伺ったためであろう。詩中の主人は、明らかに裴冕を指すもので、仇注に杜甫自らを指すとするのは無理がある」と述べるのは、情理にかなった解釈であり、筆者も同様に考える。一人の地位の高い国家の元老あるいは節度使が、その人と特別な関係になくとも、施鴻保が言うように即かず離れずの距離でその人の面倒を見たとして、裴冕のことを、自分のために発起人となって資金を集め茅屋を作ってくれた元老だとか節度使だとかと、果たして大声で触れ回るものだろうか。他人から俗物だ軽薄だとか揶揄されたり、さもなくば他人に物乞いしているなどと誤解されるのを恐れないものだろうか。はつきり言うのもまずいし、言わないのも気が引ける、となれば漠然と「故人」「主人」と言うのが、双方を丸く収める便法であろう。顧宸は「裴冕が杜甫のために廬を結んだとすれば、詩題にも裴冀公を明記すべきであろうし、詩中にも主人卜林塘という軽い言い方で済ますべきでもない。王判官が草堂の資金を贈った時には、杜甫は忘れずにそれを記した。また嚴鄭公（松原注…嚴武）が酒饌を携えて訪ねた時にも、十分に感謝するのを忘れなかった。まして杜甫のために住いを作ってくれたのだ。裴冕とする説は、信憑性がない」と述べる。情理を尽くした説明に見えるが、まだ読み深さが足りない。王嗣奭は「杜甫は情宜に厚く、一飲一食の恩義にあっても、詩を賦して感謝の思いを表現し、その名を後世に伝えた。郭某（松原注…華州刺史）とは一年もの付き合いだだったが、その人に一言隻句の言及もないことから、その人柄も分かろうというものだ」と述べ、また「邑有佳主人」「來書語絶妙」（松原注…共に「積草嶺」詩の句、注釈者たちは同谷縣令が杜甫を手紙で招いたと見る）とあるのに、いざ同谷に住み始めると、その人に言及することがないのは、口先だけ調子の良い人だったためであろう」とも述べる。それを言うべき

か、またどの程度に言うべきかは、その人とその状況を見ながら決めるものであり、「裴冕がもし杜甫のために廬を結んだとしたら、詩題に裴冀公を明記するはずだ」と断言できるほどに簡単なものではない。

韓成武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七年）は、最近の通行性の高い杜甫詩の訳注であるが、その「卜居」条には端的に「主人…当指裴冕」と注する。また李寿松・李翼雲『全杜詩新釈』（中国書店、二〇〇三年）も信頼性の高い注釈であるが、その「卜居」条には「主人…指成都的地方官。大概是成都尹裴冕」と注している。こうしてみると、近三〇年において「主人＝裴冕」説は、朱鶴齡・仇兆鰲以来失った地歩を、大きく回復しているように見受けられる。

結語に代えて

成都草堂時代の詩は、杜甫の文学の中でも独自の地位を占めている。その直前の秦州・同谷という華北の辺疆地域で作られた文学と異質であるばかりか、同じく成都で作られたはずの「成都府」詩（成都紀行詩一二首の最後の詩篇）の暗澹と屈折した気分と比較しても、大きな径庭がある。要するに、成都草堂時代の詩は、杜甫の中の漸進的な作風の変化のなかでゆっくりと熟成された産物ではなく、前後を截然と分かつべく出現した意図的な産物に相違ないのである。

従来の論者は、その大きな変化を、環境に伴う変化と理解してきた。すなわち、華北とは異なる、成都平野の温暖湿潤で物産に恵まれた風土が杜甫の生活を豊かに潤したため。また安史の兵乱と、朝廷内の政争で疲れた杜甫が、その二つの緊張から解放されて心身の平安を得たためであると。そのどちらの解釈も間違えてはいないだろう。し

かしこうした環境の変化自体に、余りにも大きく依存した解釈を与えることは、危険でもある。例えば、王勃は蜀の地に流寓した時期に、熾烈に望郷の思いを募らせたのではなかったのか。安史の乱のさなかに頭角を露し、永王李璘の乱を討伐して戦功を挙げた高適が、やがて政争に敗れて蜀の彭州刺史・蜀州刺史となった時期に、杜甫の草堂詩に似て閑かな滋味に満たされた作風に転ずることが、果してあったのか。このように考えるならば、杜甫をめぐると二つの環境の変化は、確かにその詩風の変化を刺激したことを認めたとしても、最も重要な変化は、杜甫の意識の人為性から起こったと理解しなければならぬだろう。

仮説的に述べるならば、杜甫は己れの予期に反して、成都で身に余るほどに贅沢な草堂を与えられてしまったのである。もしそれが身の丈にも合った、狭い地所に建てられた慎ましい茅屋であったならば、杜甫はそこに住まうて、今迄と変わることなく貧士の文学を作り続ければ良かった。しかし杜甫が成都で得た草堂は、百本の桃の苗木を植えてもまだ土地が余り（蕭八明府実処覓桃栽）、松や檀や李や黄梅や綿竹を植えて敷地を満たさなければならなかった。そして土地の起伏を利用して、幾つかの亭臺を配置もした（寄題江外草堂）。そればかりか、錦江（浣花溪）に面した岸边には「水檻」を設け、そこで釣り糸を垂れ、楫を繋ぐこともできた（江上值水如海勢聊短述）。

杜甫は成都の人士に暖かく迎え入れられ、立派な草堂も与えられた。杜甫は、いったい何を期待されてこのように厚遇されたのであるのか。しかしともかく杜甫はこの問に対して、自らの答を探し当てることになった。すなわちこれは、詩人として評価された期待された結果なのだ。花を流うほどに美しい錦江に面し、閑かな林塘を占め、郭内の塵事から隔てられ、総ての旅人の愁いを忘れることができる世界に住むことが許された杜甫は、草堂を与えてくれた人々の期待に正面から答えるべく、それまで誰も知らなかった前人未踏の文学領域、すなわち「草堂の住人の文学」を切り拓くことになる。

杜甫は、成都で身に余るほどに贅沢な草堂を手に入れることができた。それは複数の杜甫の理解者たちの厚意による発議の結果ではあるまい。そのような小さな厚意をいくらか寄せ集めたところで、大きな計画を決断することは難しい。その決断は、決断する権限を持った者が、一人で下した決断であるに相違なからう。——本稿ではこのような見通しの下に、その人物を裴冕に比定できないものかと考えてみたのである。

注

(1) 同谷から成都への行旅を描く紀行詩十二首の冒頭「発同谷縣」詩の詩句。「一歳四行役」とは、この年の春に①洛陽から華州、秋以降に、②華州から秦州、③秦州から同谷、④同谷から成都の、四回の行旅。

(2) 参照：古川末喜「浣花草堂の外的環境・地理的景観」(同「杜甫農業詩研究」知泉書館、二〇〇八年)。同文は、「杜甫詩に草堂の場所がどのように描かれているかを見極め、その描写の仕方から、そこに杜甫の如何なる感情が込められているか、草堂は杜甫にとってどのような意味を持つかを考察する。従って、地方誌等の二次史料を用いて、草堂の地理的場所を明らかにすることはしなかった」とあるように、古川氏の描く草堂の姿は、杜甫の詩を理解する上でしつくりとして違和感がなく、納得させられるところが多い。

(3) 成都到着の直後に高適から受け取った詩が「贈杜二拾遺」と題され、前官の供奉官「左拾遺」が明記されていることに注目。

(4) 「為農」詩に「錦里煙塵外、江村八九家。圓荷浮小葉、細麥落輕花。卜宅從茲老、為農去國賒。遠慚句漏令、不得問丹砂」。杜甫の草堂は農耕生活の場ではない。それにもかかわらず「為農去國賒」と描くのは、躬耕を事とした古来の隱士(長沮桀溺、陶淵明)に自らを擬えるものである。

(5) 杜甫が後年夔州で作った「哭王彭州掄」に「蜀路江干窄、彭門地里遙。解龜生碧草、諫獵阻清霄。頃壯戎塵出、叨陪幕府要」とある。王掄は侍御使としての諫言が咎められて朝廷から放逐された。蜀で不如意の境遇にあった彼に目を掛けたのが彭州刺史の高適だった可能性がある。その後、西川節度使嚴武に辟召されて幕僚となり、最後は彭州(彭州刺史?)で没した。

- (6) これに先立つ上元二年(七六一)夏、嚴武は梓州刺史・劍南東川節度使(京銜は兼御史中丞)として蜀の梓州(四川省三台市)に赴任した。この年の四月、梓州刺史の段子璋が叛し、東川節度使の李奐は敗れて成都に奔る。嚴武は、その李奐の後任だったさらに同年一〇月、西川節度使の崔光遠が卒し、嚴武はその後任として成都尹・西川節度使(京銜は御史中丞)として成都に赴任し、それまでの東川節度使を兼任した。
- (7) 「旧唐書」「嚴武傳」に「前後在蜀累年、肆志違欲、恣行猛政。梓州刺史章彝初爲武判官、及是小不副意、赴成都杖殺之、由是威震一方」とあるなど、その性格は粗暴にして果斷だったらしい。
- (8) 杜甫「陪鄭広文遊何將軍山林十首」「重過何氏五首」。
- (9) 杜甫が一年半余りの梓州・閬州方面の放浪から草堂に帰ってきた時、留守中に荒れた草堂を修復するために友人に援助を無心した。「王録事許修草堂費不到聊小誌」詩に「爲曠王録事、不寄草堂費。昨屬愁春雨、能忘欲漏時」。王録事は草堂の修繕費を出す約束したのに、約束の履行が遅れたために、杜甫はこの詩をもって催促している。
- (10) 杜甫には複数の草堂があったと言われる。曰く、同谷草堂・梓州草堂・瀘西草堂。このうち杜甫の定住の場としての実質をやや備えたのは、夔州の瀘西草堂であろう。しかしこの草堂は、当地の権力者、夔州都督・柏茂琳によって杜甫の居住のために提供されたお仕着せのものであり、杜甫がその文学を託すために工夫を凝らした草堂ではない。またそこに住まった期間も半年ばかりと短く、その世界の中で独自の文学を熟成させる場となることはなかった。
- (11) 杜甫の四人の弟(穎・観・占・豊)の中、杜甫に付き従ったのは杜占。杜甫が成都草堂を離れて梓州に逗留していた時の作「舎弟占歸草堂檢校聊示此詩」に「相隨獨爾來」。
- (12) 以上「蕭八明府堤実処覓桃栽」「從韋二明府續処覓綿竹」「憑何十一少府邕覓檀木栽」「憑韋少府班覓松樹子栽」「詣徐卿覓果栽」
「又于韋処乞大邑瓷碗」。
- (13) 仇注では「韋二明府續」は利州綿谷縣令、「何十一少府邕」は利州綿谷縣尉と言うが、根拠不明。ちなみに、綿竹を所望したから綿谷縣令と果たして言えるのか。「韋少府班覓」について、仇注は黄鶴「補注杜詩」に「後有「涪江泛舟送韋班」詩、韋当是涪江尉」とあるのを引用して、涪江縣尉とする。根拠が示されるのはこれだけで、他の人物については推測の域を出ない。
- (14) 同谷紀行詩の第一首「發秦州」に「無食問樂土、無衣思南州。漢源十月交、天氣如涼秋。草木未黃落、況聞山水幽。栗亭名更佳、下有良田疇。充腸多薯蕷、崖蜜亦易求。密竹復冬筍、清池可方舟」と、同谷の恵まれて条件を述べる。これは同谷の「佳主人」の誘いの言葉を復誦したものであろう。

- (15) 杜甫の成都到着直後の「成都府」詩に「曾城填華屋、季冬樹木蒼。喧然名都會、吹簫聞笙簧」とその富庶の様を伝える。また『資治通鑑』卷二五九に唐末の黄巢の乱でそれまでの繁栄を失った揚州を述べて「先是、揚州富庶甲天下、時人稱：揚一益二」。また『全唐詩』卷八七七に載せる「鹽鐵諺」条に「唐世、鹽鐵轉運使在揚州、尽筦利權、商賈如織、天下之盛、揚為首、而蜀次之。故諺曰：揚一益二」。
- (16) 秦州の西枝村で草堂の卜居を計画した時も、「西枝村尋置草堂地夜宿贊公土室二首」の詩題に明らかのように、土地の選定が根本問題となっている。
- (17) 『旧唐書』卷一〇「肅宗本紀」に「乾元二年」六月乙未朔、以右僕射裴冕為御史大夫・成都尹、持節充劍南節度副大使・本道觀察使」。なお『旧唐書』卷一三「裴冕傳」および『新唐書』卷一四〇「裴冕傳」では「劍南西川節度使」。また同本紀にその離任時期を示す資料として「乾元三年」三月壬申、以京兆尹李若幽為成都尹、劍南節度使」。
- (18) 「原注：乾元二年十二月一日、自隴右赴劍南紀行」。
- (19) 連作一二首の最後となる「成都府」には、もはや山の姿は現れない。羅城の中を埋め尽くす豪奢な家並み、音曲がひるがえる繁栄の巷が描かれ、杜甫は、その見知らぬ世界の入口に異邦人として立ちすくむ。全詩を掲げる。「翳翳桑榆日、照我征衣裳。我行山川異、忽在天一方。但逢新人民、未卜見故鄉。大江東流去、游子日月長。曾城填華屋、季冬樹木蒼。喧然名都會、吹簫聞笙簧。信美無与適、側身望川梁。鳥雀夜各歸、中原杳茫茫。初月出不高、衆星尚爭光。自古有羈旅、我何苦哀傷」。
- (20) 蜀道の險阻を主題とする文学に、樂府「蜀道難」(『樂府詩集』卷四「瑟調曲」)がある。しかし梁の簡文帝に始まり、李白に及ぶ「蜀道難」詩に、蜀道の体験を踏まえた作品はない。杜甫の一連の成都紀行詩は、この点で画期的な作品である。なお狹義の文学(詩賦)に限定しなければ、西晋・張載が、蜀郡太守となった父の張取を省観したおりの体験を踏まえて作った「劍閣銘」(『文選』卷五六)がある。
- (21) 杜甫が華州司功參軍を辞めたのは、『新唐書』杜甫伝以来の通説である「自発的辞官」ではなく、免官であった可能性が高い。参照：松原「杜甫の華州司功參軍時期についての覚書―併せて閻琦・王勳成の免官説の検討―」『中国詩文論叢』三〇集、二〇一一年。
- (22) 一作「多病所須惟藥物」。
- (23) 字は欽之。北宋の元祐六年(一〇九二)の進士。『注杜詩及文集』二〇卷などがあつたと伝えられるが散逸。
- (24) また宋代の詳細な杜甫年譜である魯訥(一〇九九―一一七五)「杜工部詩年譜」(『分門集注杜工部詩』卷首所載)に、「二年已

亥公年四十八……裴冕、鎮成都、公遂卜居錦江。上元元年庚子公年四十九。裴冀、公為公卜居成都西郭浣花溪」とあり、やはり「主人」裴冕」説を唱へる。

(25) 『旧唐書』卷一〇「肅宗本紀」に「乾元三年、同年改元して上元元年」三月壬申、以京兆尹李右幽為成都尹、劍南節度使。

(26) 和刻本の顧宸『辟疆園杜詩注解』七言律詩卷二「卜居」の題下注には「劍南節度使裴冕為卜成都西郭浣花溪、以居」とあり、「主人」裴冕」説を採る。仇兆鰲が何に依拠したか不明。

(27) ただしこの仇兆鰲の主張は、不穩当。「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首」其二の「錦里逢迎有主人」は、詩題にも明らかのように嚴武を客人に想定して、その客人を草堂に迎える杜甫自身を主人に見立てる。このように「主人・客人」の關係で自分を主人と言うことは適當だが、この「卜居」詩のように「客人」を想定しない文脈で自分を主人と称するのは不適當である。

仇兆鰲の「主人」杜甫自身」説には、この点の無理がある。

(28) 日本への仇注の影響では、鈴木虎雄『杜少陵詩集』第二冊「卜居」に「主人 自らいふ」、目加田誠『杜甫』（集英社漢詩大系、一九六五年）「卜居」に「主人 作者自身」など。

(29) この詩の「裴施州」（施州刺史裴某）が裴冕ではない別人を指すとは、朱鶴齡以来の定説で、郁賢皓『唐刺史考全編』第四冊、二五三九頁（安徽大学出版社、二〇〇〇年）にも「『全唐』卷三二一杜甫「寄裴施州」……「廊廟之具裴施州」。友人陶敏謂杜詩乃大曆初於夔州作、詩中裴某不知其名」と述べる。しかし私見では、裴冕を指す可能性も皆無ではない。

(30) 陳貽焮は、黃鶴・鮑欽之に従って「故人供祿米」の「故人」も裴冕と解釈するが、私見では「故人」はすでに述べたように裴冕以外の、より親密な關係にある人物（王十五司馬）を指すものと解釈したい。

〔附記〕 本稿は、平成二十二年度専修大学研究助成（個別研究）「杜甫の伝記的研究」の研究結果の一部である。